

## 14. 家族と婚姻について

豊 沢 彩 子

- I はじめに
- II 年齢別人口と世帯の構成
- III 通婚圏
- IV 家同士のむすびつき
- V おわりに

### I は じ め に

人間同士のむすびつきは、社会が複雑化すればするほど多種多様に形を変え、性質を異にしていく。それを外部から知ろうとするのは当然容易なことではないが、いくつかの方法は与えられている。月橋の調査で得られたデータをもとに、ここでは家族、婚姻、家同士のむすびつきを見ていく。

### II 年齢別人口と世帯の構成

現在、月橋には122世帯があり、544人の人が住んでいる。表－1は1993年の月橋、1983年の月橋、1991年の日本全体の年齢別分布表である。

表－1 年齢別分布表（1）

年 齢	月 橋 (1993)		月 橋 (1983)		日 本 全 体 (1991)
	人 数	%	人 数	%	%
0 ～ 14	94	17.3	109	20.6	20.6
15 ～ 64	350	64.3	357	67.4	67.4
65 ～	100	18.4	64	12.1	12.1
計	544	100	530	100	100

月橋（1993）のデータは住民票、月橋（1983）のデータは町会名簿、日本全体のデータは『日本国勢図会』の資料による。

月橋においてはここ10年間で0～14歳、15～64歳の層の全体に占める割合がそれぞれ3％ほど減少しており、その分65歳以上の層の割合が6％ほど上昇している。日本の、全人口に占める高齢者人口の割合が増加していく傾向は、月橋においてもあらわれている。

また（データに2年ほどズレがあるが）日本全体の年齢別人口分布と月橋の現在の年齢別分布

を比較してみると、0～14歳の層の占める割合はほぼ同じであるが、15～64歳の層の占める割合が日本全体より月橋の方が5%ほど少なく、65歳以上の占める割合が日本全体より月橋の方が6%ほど高くなっている。日本社会の産業構造の変化、都市化の進展、雇用者社会化にともなう家族の分散などによる農村部の過疎化社会の特徴である労働人口の減少と高齢者の増加がみられる。しかしここ10年間で月橋の人口自体はむしろ増加しており、過疎化社会であるとはいえない。

次に表－2をもとにもっと細かく年齢別人口分布を見ていこう。

ここ10年間で増加しているのは15～24歳、35～44歳、45～54歳、65～74歳、75～84歳、85歳以上の層で、35～44歳、65～74歳の層の増加がそれぞれ4%ほどでやや高くなっている。逆にここ10年間で減少しているのは、0～14歳、25～34歳、55～64歳の層で、25～34歳の層の減少が6%と高くなっており、55～64歳の層の減少も4%ほどとなっている。25～34歳の層の減少は、子供を出産する適齢期の世代の減少をあらわしており、0～14歳の層の減少の結果にも結びついていると考えられる。

表－2 年齢別分布表（2）

年 齢	1993年		1983年	
	人数	%	人数	%
0 ～ 14	94	17.3	109	20.6
15 ～ 24	71	13.1	62	11.7
25 ～ 34	57	10.5	87	16.4
35 ～ 44	96	17.6	70	13.2
45 ～ 54	65	11.9	57	10.8
55 ～ 64	61	11.2	81	15.3
65 ～ 74	63	11.6	38	7.2
75 ～ 84	28	5.1	22	4.2
85 ～	9	1.7	4	0.8
計	544	100	530	100

1993年のデータは住民票、1983年のデータは町会名簿の資料による。

1983年には人口の2割を0～14歳の層が占めており、最も人数が多かった。これはこの層に次いで人数が多かった25～34歳の層が、子供を再生産する世代であることと関係していると考えられる。25～34歳の層に次いで人数が多いのが55～64歳の層であるが、この層は25～34歳の世代の親の世代であると考えられる。また85歳以上の占める割合は1%に満たなかった。

次に1993年のものを見てみると、多いのはやはり0～14歳の層であるが全体の2割には届いていない。これと同じくらいのが35～44歳の層であるが、これは1983年のデータの25～34歳の世代がそのままスライドした結果であろう。74歳までのその他の層はそれぞれ一割ずつ、と頭を並べているが、85歳以上の層の全体に占める割合が2%近くになっているのが目につく。

図-1 年齢別分布図

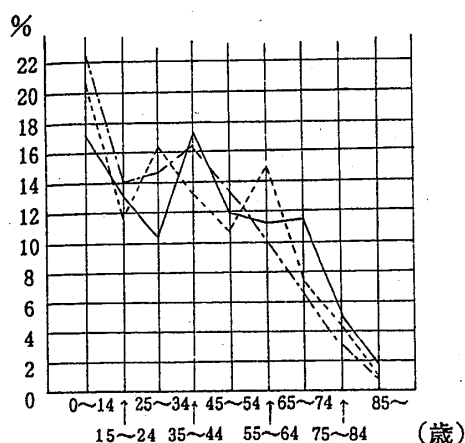


図-1は表-2をグラフにしたものである。比較のために1984年の日本全国のデータもならべてある。

まず(データに一年のズレがあるが)1983年の月橋の人口分布と1984年の全国の人口分布を見てみよう。月橋のグラフは24歳未満の層は低目に、65歳以上の層は高目に全国のグラフに沿って

てなっている。その中間の部分では全国のグラフは1つの山をつくり、月橋のグラフは2つの山をつくっている。全国のグラフにくらべて月橋のグラフの55~64歳の層の割合が高いのは、月橋が農村部であるので都市部に比べて戦中戦後期に食糧事情が良かったため死亡率が低かったからではないかと考えられる。

次に1993年の月橋のグラフと1983年の月橋のグラフを比較してみると、45~54歳の層までは実線は破線をほぼそのまま右にシフトした形になっているが、そこから右側の部分では、破線部より実線部の方がなだらかな形となっていることがわかる。1983年のグラフの55~64歳の層の山が10年間で減少しているのは層の高齢化にともなう死亡によると考えられる。

表-3は現在の月橋の1世帯あたりの人数である。比較のため1983年のデータもあわせてある。

1993年のデータと1983年のデータを比較してみると、1世帯4人以下の世帯の占める割合が最近10年間で10%ほど増加しており、5人以上の世帯の占める割合がその分減少している。世帯規模の縮小の傾向は全国的なものだが、月橋でもやはりあらわれている。1世帯あたりの平均人員は1993年は4.46人で1983年は4.73人である。ちなみに日本全体の1世帯あたりの平均人員は1990年の国勢調査による

表-3 1世帯あたり人数

	1993 年		1983 年	
	1(人)	5(戸)	1(戸)	0.9(%)
2	17	13.9	12	10.7
3	15	12.3	13	11.6
4	24	19.7	19	17.0
5	21	17.2	27	24.1
6	25	20.5	29	25.9
7	11	9.0	8	7.1
8	4	3.3	2	1.8
9	0	0	1	0.9
計	122	100	112	100

資料の出所は表-2と同じ。

と2.99人である。それと比較すると月橋の1世帯あたりの人員はまだ多い。日本全体の傾向として増加率が高いのは夫婦のみの世帯と単独世帯であるが、表-3で1人の世帯と2人の世帯が増加していることから、この傾向が月橋でもあらわれているといえる。なお石川県の1世帯あたりの人員は1990年では3.41人、1985年では3.22人である。(それぞれ2年のズレがあるが)1993年と1983年の月橋のものと比較してみると、石川県の値より月橋の値の方が大きくなっていることがわかる。都市部に比べて核家族より直系家族の割合が高い農村部の特徴があらわれている結果と考えられる。

次に世帯の世代構成について見てみよう。

表-4を見てみると最近10年間では全体に占める割合は1世代の世帯が増加しており、3世代の世帯はほぼ変わらず、2、4世代の世帯は減少している。しかし実数からいえば1、3世代の数が増え、残りの数は変わっていない。1世代世帯の増加の割合は4%強と高く、単身、夫婦のみの世帯の増加をあらわしている。現在の月橋の世帯は3世代世帯が最も多く、全体の約半数を占めており、次いで2世代世帯が3割強、1世代世帯が1割強となっている。

表-4 世帯の世代構成

	1993 年		1983 年	
	戸数	割合(%)	戸数	割合(%)
1 世代	16	13.1	10	8.9
2 世代	41	33.6	41	36.6
3 世代	60	49.2	55	49.1
4 世代	5	4.1	6	5.4
計	122	100	112	100

資料の出所は表-2と同じ。

表-5は1993年と1983年の月橋の世帯の家族構成である。

表-4と表-5をあわせてみて、1993年のデータの単身+夫婦のみの世帯数がイコール1世代世帯の数となっていないのは兄弟同居の数も1世代世帯の中に含まれているためである。また核家族数より2世代世帯数が多くなっているのは直系家族の2世代目が結婚しているがまだ

表-5 世帯の家族構成

	1993 年		1983 年	
	戸数	割合(%)	戸数	割合(%)
単 身	5	4.1	1	0.9
夫婦のみ	10	8.2	9	8.0
核 家 族	33	27.0	31	27.7
直 系	74	60.7	71	63.4
計	122	100	112	100

資料の出所は表-2と同じ。

子供がないという場合や、核家族を構成している親の兄弟姉妹が同居している場合の世帯の数が含まれているためである。

現在の月橋の家族の構成は直系家族が最も多く、全体の約6割を占めている。次いで核家族が約4分の1、夫婦のみ、単身の世帯が合わせて1割強である。10年前は単身世帯の占める割合が

1%に満たず、直系家族の割合は現在より3%ほど多かった。10年間で核家族、直系家族の割合は減少し、夫婦のみの世帯はほぼ変わらず、単身の世帯は3%ほど増加している。しかし単身世帯の内訳を見てみると、1983年にも単身であった1世帯をのぞく4世帯は皆40代以下の男性の世帯で、そのうち3世帯は1983年の名簿には記載されていなかったため、町会名簿と住民票という資料の違いから出てきた数値であると考えられる。核家族、直系家族は合わせて3%ほどの減少となっているが、これも実数で見えてみると、単身がふえた分、あとは変わっていない結果である。なお、1990年の国勢調査の資料によると、日本では単身世帯が23%、核家族が60%、3世代家族が12%を占めている。それから比較してみると、月橋では単身、核家族の割合はかなり低く、直系家族の割合はかなり高い。月橋は日本全体のデータとくらべて単身世帯の割合は19%、核家族の割合は25%ほど少なく、直系家族の割合は49%も多い。

こうしてみると、月橋の世帯の構成は日本社会全体の世帯の構成の変化にもかかわらず、従来の形を変えていないと考えられる。

### Ⅲ 通 婚 圏

通婚圏については、調査を行った世帯のうち34の世帯で聞いた資料にもとづいて構成してある。全世帯の3割ほどの資料であるので全体の傾向であるとはいえないが、時代による大まかな違いはわかるだろう。①は1945年以降に生まれた人（つまり大体1965年以降に結婚した人）の婚姻について、②はそれ以前で1914年以降に生まれた人（つまり大体1934年以降に結婚した人）の婚姻について、③は1880年代から1914年までに生まれた人（つまり大体1900年代以降に結婚した人）の婚姻について、④は1850年代から1880年代までに生まれた人（つまり大体1870年代以降に結婚した人）の婚姻についてのデータである。

表-6 月橋への婚入者の出身地別人数 ( )内はムコ

	①1945～ 生まれ		②1914～1945 生まれ		③1880年代～1914 生まれ		④1850年代～ 1880年代生まれ	
月 橋	0 人	0 %	23(5)人	54.8 %	19(2)人	67.9 %	10(3)人	58.8 %
その他鶴来町	4(1)	13.3	4	9.5	4(1)	14.3	4(2)	23.5
その他石川郡	7(2)	23.3	7(1)	16.7	1	3.6	1	5.9
能 美 郡	3(1)	10.0	3(1)	7.1	3(1)	10.7	1	5.9
金 沢 市	7(1)	23.3	3	7.1	1	3.6	1	5.9
松 任 市	3(2)	10.0	1	2.4	0	0	0	0
河 北 郡	2	6.7	0	0	0	0	0	0
そ の 他 県 内	1	3.3	0	0	0	0	0	0
県 外	3(1)	10.0	1	2.4	0	0	0	0
計	30(8)	100(26.7)	42(7)	100(16.7)	28(4)	100(14.3)	17(5)	100(29.4)

表－7 月橋からの婚出者の婚出先別人数 ( )内はムコ

	①1945～ 生まれ		②1914～1945 生まれ		③1880年代～1914 生まれ		④1850年代～ 1880年代生まれ	
月 橋	0 人	0 %	22(4)人	40.7 %	10 人	27.0 %	3(2)人	42.9 %
その他鶴来町	3	10.3	14	25.9	10	27.0	1	14.3
その他石川郡	7	24.1	2	3.7	3	8.1	0	0
能 美 郡	4	13.8	5	9.3	1	2.7	1	14.3
金 沢 市	6	20.9	5	9.3	6	16.2	1	14.3
松 任 市	3	10.3	2	3.7	2	5.4	1	14.3
河 北 郡	2	6.9	0	0	0	0	0	0
そ の 他 県 内	1	3.4	0	0	2	5.4	0	0
県 外	3	10.3	4	7.4	3	8.1	0	0
計	29	100	54	100	37	100	7	100

表－6、表－7を比較してみると、時代がくだるにつれて嫁の婚入元が広がっていることがわかる。また古い世代の通婚圏では、嫁の婚入元に比べて嫁の婚出先が広がっていることがわかる。このことは、村から町へという嫁の流れはあるが町から村へという流れはあまりないからではないかと考えられる。最近では嫁の婚入元と婚出先にあまり変わりがなくなったが、月橋の宅地に新しい住宅が多く建てられるようになったりしてそのような村、町の差があまり感じられなくなったからではないかと考えられる。

②の1914年から1945年までに生まれた人の婚姻にまでさかのぼると、月橋内での嫁のやり取りが多くなっていることがわかる。時代がくだるにつれて通婚圏が広がっていった。

Aさんの家では2代続けて寺井から嫁をもらっているが、これはAさんの家で九谷焼の行商をしていた関係もあった。またBさんの家では、月橋から嫁いだ人のある小柳の家から嫁をもらっている。Cさんの家では近所の人で紹介で鳥越から嫁をもらっている。またDさんの家では古い代に白山三ノ宮から嫁をもらったが、三ノ宮に嫁いだその人の姉妹が男子をのこして早くに亡くなったので、自分の娘を後ぞいに入れ、さらにその男子に別の自分の娘を嫁がせている。さまざまな縁で婚姻関係が形成されていることがわかる。

このように通婚圏には距離的な要因だけではなく社会的な要因も大きく作用しており、月橋出身者の婚姻は手取川流域の地区と関係が深い。

次に最近約30年間の月橋出身者の婚姻309件について見てみよう。

まずはじめに月橋出身者同士の婚姻は16組あり、婚姻数全体の約5%を占めている。結婚後はいずれも月橋に住居をおいている。(これから後述する資料はいずれも月橋出身者同士の婚姻のデータをのぞいているので注意されたい。)

次に月橋出身の男性の婚姻について見てみよう。

表-8 相手女性の出身地

金 沢 市	36(人)	23.2(%)
鶴 来 町	19	12.3
その他石川郡	22	14.2
能 美 郡	14	9
松 任 市	5	3.2
そ の 他 県 内	21	13.5
関 東	6	3.9
北陸(石川を除く)	7	4.5
中部(北陸を除く)	10	6.5
近 畿	7	4.5
そ の 他	8	5.2
計	155	100

表-9 結婚後の住所(男性)

月 橋	82(人)	52.9(%)
鶴 来 町	10	6.5
金 沢 市	21	13.5
能 美 郡	4	2.6
そ の 他 県 内	7	4.5
関 東	14	9
北陸(石川を除く)	1	0.6
中部(北陸を除く)	5	3.2
近 畿	11	7.1
計	155	100

表-8～12ともに資料の出所は『広報つるぎ』(1962～1993)。

相手女性の出身地は金沢市が最も多く23%ほどである。それ以外はやはり距離が近いほど多い傾向が見られる。県内出身の占める割合が75%と高くなっており、4人に1人が県外出身という計算になる。

結婚後の住所ではやはり月橋が最も多く、約半数を占めている。次いで金沢市が多く14%ほどとなっている。県内の占める割合が80%と高く、かなりの割合で地元に残っているといえる。

次に月橋出身の女性の婚姻について見てみよう。

相手の出身地は前述の資料と同じく金沢市が多く全体の3割ほどである。県内出身の占める割合が8割で月橋出身の男性の婚姻のケースより多くなっているが、出身地の分布はより分散傾向にあり、男女の婚姻の違いがあらわれている。

結婚後の住所も金沢市が一番多くなっている。県内の占める割合が83.3%で月橋出身の男性の婚姻のケースより少し高くなっており、地元定着率が高いといえるが、その分布は分散傾向にある。

表-10 相手男性の出身地

金 沢 市	41(人)	29.7(%)
鶴 来 町	9	6.5
その他石川郡	13	9.4
能 美 郡	15	10.9
松 任 市	11	8.0
そ の 他 県 内	22	15.9
関 東	5	3.6
北陸(石川を除く)	5	3.6
中部(北陸を除く)	2	1.4
近 畿	9	6.5
そ の 他	6	4.3
計	138	100

次に月橋に婚入してきた他地区出身者88人の出身地を見てみよう。このうち6人は男性で全体の7%ほどである。県内5人、県外1人で、位置的には分散している。

表-11 結婚後の住所（女性）

金 沢 市	47 (人)	34.1 (%)
鶴 来 町	12	8.7
その他石川郡	14	10.1
能 美 郡	12	8.7
松 任 市	13	9.4
月 橋	6	4.3
そ の 他 県 内	11	8.0
関 東	9	6.5
北陸(石川を除く)	4	2.9
中部(北陸を除く)	2	1.4
近 畿	7	5.1
そ の 他	1	0.7
計	138	100

表-12 月橋への婚入者の出身地（女性）

金 沢 市	17 (人)	20.7 (%)
鶴 来 町	13	15.9
その他石川郡	15	18.3
能 美 郡	11	13.4
松 任 市	5	6.1
そ の 他 県 内	14	17.1
関 東	1	1.2
北陸(石川を除く)	2	2.4
中部(北陸を除く)	1	1.2
近 畿	1	1.2
そ の 他	2	2.4
計	82	100

表-12は月橋への女性の婚入者の出身地である。金沢市が最も多く、それ以外では距離が近いほど多くなっている。県内の占める割合が約92%と高くなっており、月橋への婚入者のほとんどは県内出身であるといえよう。

こうして見てくると、表-6、表-7の通婚圏の時代による変遷とあわせてみても、最近の婚姻では金沢市との関係が深いと考えられるが、これは交通事情の変化によるものと推測される。また地元定着的傾向が強いと考えられるが、これは時代による変遷を見ても従来と大きく変わっておらず、月橋が農村部であることと関連していると思われる。

#### IV 家同士のむすびつき

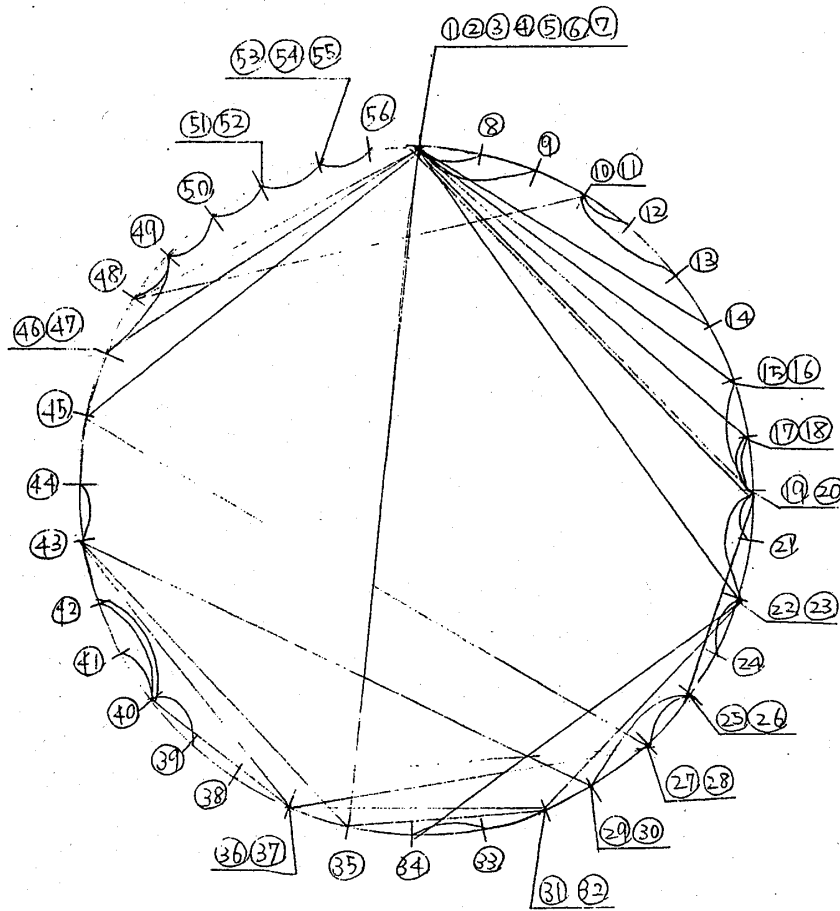
次の月橋で聞き取りをした資料をもとに56軒の家の、婚姻、分家によるつながりを見てみよう。

まず本家一分家間での嫁、ムコのやり取りについて見てみると、嫁のやり取りがあったのは2組の家同士、ムコのやり取りがあったのは1組の家同士だけで、残りの17軒では直接のやり取りはなかった。このことから月橋では本家一分家間でさらに婚姻関係を持つという傾向は少ないということがわかる。

図-2は56軒の家の婚姻関係である家同士を線で結んだものである。本家一分家関係にある家は一か所にまとめてある。



図-2 婚姻によるイエの結びつき



56軒の家全体が近い遠いはあるにせよ姻戚関係でつながりあっているのがわかる。同じ家同士が複数の婚姻関係を結んでいるのも3組みられる。

次に家格による家同士のむすびつきを見てみる。月橋で家格のようなものという十人頭が考えられるが、十人頭だった家について調べてみると、そのうち7軒について聞き取りをしたが、本家一分家関係にある家同士が1組あるのをのぞいて、直接の嫁、ムコのやり取りは見られなかった。ただし同一の家に嫁、ムコを出している、あるいはもらっているという関係にまで広げると3組5軒あった。このことから、十人頭という制度が家格としてさほど絶対的なものではなかったということも考えられるし、あるいは聞き取りをしたそれ以外の家もそれ相応の家であって、あまり違いとなってあらわれていないということも考えられる。

婚姻関係について聞き取りをした際、「月橋は村内婚が多い」という印象をうけた。他地区と具体的に比較したわけではないので正確な認識とはいえないが、次に村内婚についての住民の言葉を聞いてみよう。Eさん(59歳女性)は「昭和10年生まれの娘まではみんな月橋の中へ嫁に行った。その2、3年後に生まれた人ぐらいから外へもどんどん嫁に行くようになったが、これは勤

めに出るようになったからではないか。また勤めに出られるようになったのは、農作業に機械を使えるようになって、それまでのように手間がかからなくなったことが大きな要因だろう」と語ってくれた。Eさんの話からは、村内婚の形成には農作業の忙しさが大きく影響を与えていたという考えを導き出せる。このことに付随して思い出されるのが「月橋からは嫁をもらっても月橋に嫁をやるな」ということわざめいた言葉である。この言葉はFさん（55歳男性）が教えてくれた言葉であるが、その意味は「月橋の嫁は苦勞をするから」ということである。似たような趣旨で、「月橋はよく働くところ」という言葉は多くの家で聞かれた。Gさん（57歳女性）「月橋はとにかくよく働くところ」Hさん（44歳女性）「私は吉野谷から嫁に来たが、月橋の第一印象は“よく働くところ。（だから）いやなところ”だった」という言葉に、外部の人たちの月橋へのイメージがよくあらわれている。Iさん（54歳女性）は「嫁に来た時“月橋はよく働くところだ”と思った。私の実家は九谷のところだったのでのんびりしていたが、月橋は山も田もあるし、昔は機械もなかったのでたいへんだった」と話してくれた。またJさん（69歳女性）は「嫁に来た当時は倉ヶ嶽の畑の仕事や杉山の世話、そして田んぼの仕事とぐるぐるといろんな仕事があって、鳥越での山だけの仕事に比べて仕事がきついと思っていた」と話してくれた。しかし同年輩で同じく鳥越から嫁いできたKさん（68歳女性）が「ものすごく仕事がひどいところで“月橋だけは嫁に行くもんでない”と言われていたが、鳥越での田んぼ仕事は牛を使ったりしてもともしきつい仕事をしていたので、月橋に嫁に来てみたら牛の食べる草を刈らなくてもよい分だけ楽だった」と話しているのは面白い。とにかく畑、山、田とやるべき仕事が多いという事実が内にも外にも「月橋はよく働くところ」という強固なイメージを植えつけていたことは間違いなさそうだ。

Eさんの話では、基盤整備が行われ、農作業の機械化が進んだことによって、それまで大変だった仕事が楽になり、男性も女性も外へつとめに出るようになったことから外で結婚相手を得る機会が多くなり、村内婚が減ったという流れが読み取れる。水田の基盤整備が行われたのは1962～64年で、その後機械化が進んだのだが、この時期結婚適齢期にある人は1937～38年以降に生まれた人で、表-6のデータと比べあわせてみても、確かに①期の村内婚のデータは0%で1937～38年以降に生まれた人の村内婚のケースがまれであることも推測される。

他にも村内婚についてさまざまな考えを聞かせていただいたが、Lさん（61歳男性）は「月橋の中に親せきがないので、親せきを作るために月橋の中から嫁をもらった」と話してくれた。またMさん（61歳女性）は「村内婚が多かったのは、他所から来た嫁だと近所をおぼえたりするのが大変だが、村内の者ならその手間もかからないからではないか」と話す。Nさん（64歳男性）は「昔はいとこ同士で結婚することが多かった。財産を守るという意味もあったのかもしれない。気心もしれているので話もまとまりやすかったということもある」と語る。LさんやMさんが話してくれた言葉からは、村内でのコネクションやネットワークがいかに重要視されていたかがよくわかる。村内婚によって村全体が緊密な関係を築きあげていく様子がうかがえる。

またNさんの言葉からは、村内婚の形成には財産の分散を防ぐといった経済的理由も作用しているのではないかという考えも見られる。

こうして村内婚に関する住民の言葉を見てきたわけだが、前掲の表－6、表－7を再び見ると、実際数値的には一番多い時期で村内から嫁をもらう割合が7割くらいと、本当に「村内婚が多い」と言えるかどうか疑問なところがある。「村内婚が多い」という印象が強いのは上述したようないろいろな要因が関係しているからではないかと考えられる。

聞き取りを行った際、もう一つ印象に残ったことは、ムコ養子の多さである。表－6を見ると、婚入者数におけるムコ養子の割合が一番多い④期ではほぼ3割の数字となっている。それについて詳しく調査するまでにはいたらなかったが、住民の言葉をいくつかあげてみるにとどめておく。Oさん（58歳男性）の話では「昔は村外から養子に來た人は村の総会に出席してもあまり発言権を与えられず、話はじめると“声が小さい”などとヤジられた」など外からのムコ養子への風あたりの強さがわかる。いっぽう「嫁のいない男はいるが、ムコのいない適齡期の女はいない。ムコ養子にはなかなか來てもらえないからムコ養子は大事にされる」といったPさん（67歳男性）のような言葉も聞かれた。

## V お わ り に

日本全体の数値に比べて労働人口の割合が低く、高齢者人口の割合が高いという過疎化社会の特徴を呈していながら、全人口、世帯数は漸増しているという月橋の人口の様子をⅡで述べたが、これは田をつぶして宅地にした場所に外から移住者が入ってきているためではないかと考えられる。この辺に月橋を単純に農村部の定義にあてはめられない状況があらわれている。Ⅲで見たように金沢市とのつながりが深いことも、宅地の増加と同じ原因から語ることができるだろう。また月橋が典型的な農村像にあてはまらないことは、Ⅳで見たように、月橋が田だけでなく山も畑もやらなければならないような立地条件にあったことからわかる。

典型的な農村部とは少し趣きを異にした月橋は、それ故にこれまでの歴史も、これから先の展望も、紋切り型には測れないものがある。しかし家族構成、婚姻状況の変遷にあらわれているように、時代の流れは月橋においても確実に人間同士のむすびつきの形に変化を与えてきている。やがてそれをおおう社会自体が何がしかの変化をはじめるとは疑いないことだろう。